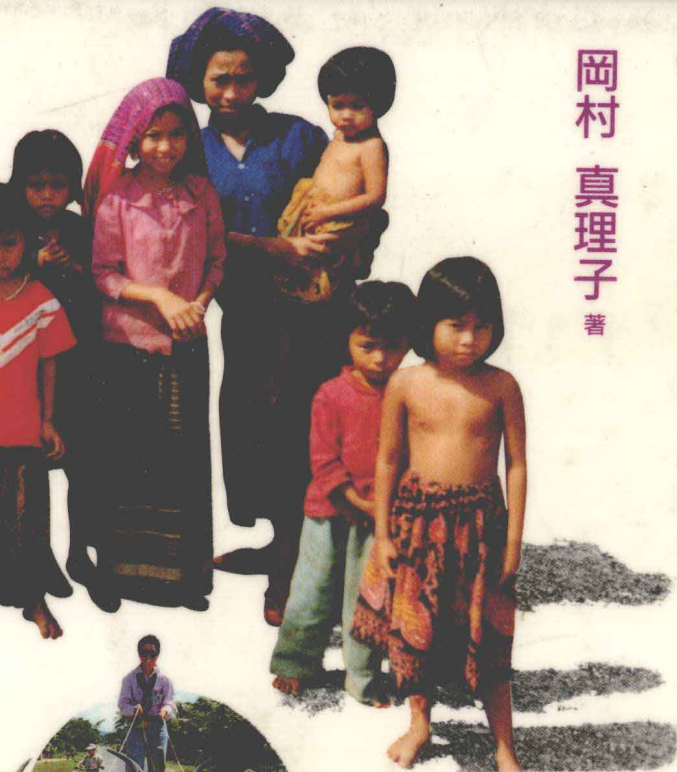


ボランティアだから できること

岡村 真理子 著



マリコ、
カンボジア400日

ボランティアだから できること

岡村 真理子 著

ボランティアだからできること

Printed in Japan

著 者 岡村真理子

発 行 株式会社 リヨン社

東京都文京区音羽 1 の21の11

電 話 東 京 (3946)0 0 6 7

振 替 東 京 0 - 5 4 7 2 8

発 売 株式会社 二見書房

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 ナショナル製本

© Mariko Okamura

落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-576-93170-9

はじめに

一九九二年五月二十日。八人のボランティアは日本を出てまずバンコック。その日、バンコックは、外出禁止令が敷かれ、空港は閑散としていた。市内に出る交通手段はなし、予約のあったホテルに電話をすると、今、学生のデモ隊と軍隊がホテルの真ん前で衝突しているから宿泊は無理でしょう、とのこと。多難な出発となった。でも誰もこぼさない。これからわたしたちを待ち受けている任務の重さは、ホテルの不便とは比べられないほど大変なのを予感していたから。

そして、一切の任務を無事終えて私が日本に帰ってきたのが一九九三年六月二十六日。約四百日の国連ボランティアの仕事だった。

この間、日本のマスコミは総力を挙げてカンボジア報道に取り組んでくれた。残して来た家族のことを思うと、少しでも現地の様子が分かってくれたら、と取材には極力協力した。わたしたち一足先にカンボジア入りをした国連ボランティアが、一体何をしていて、UNTAACが何を目指していて、そして、日本のPKO要員がどんな活動をしていたか、きっと報道は微に入り細に入りなされたことだろう。でも、報道には限界もある。表にでて来なかったわたしたちの仕事や生活を伝えるのは、今度はわたしたち自身なのかもしれない。

悲しい事件もあった。危険な場面もあった。危機一髪の危ない事も、信じられないような事

もいくらでもあった。素直に、危険や問題を伝えられない事もたくさんあった。しかし、ここは、同時に人の住んでる所、山があり、川があり、広い大地があり、自然が丸ごと残っているところだ。つらい、苦しい任務があっても、補ってあまりある楽しみがあり、人の情の厚さ、深さにじんときるうれしさもあった。

この本は、公式のUNTACレポートでもなければ、国連ボランティアのカンボジアでの全活動報告といった類いのものでもない。言ってみれば、社会に出そびれた主婦の生き方捜しのすえ、たまたま行き着いたカンボジアでの、見たり聞いたりの、体当たり体験生活思ひ出集かも知れない。いきあたりばったりでの一所懸命が、育児であり、スポーツであり、カルチャー教室通いであり、そして、ボランティア初体験となったのだ。

一所懸命か一生懸命か、自宅で始めた寺子屋の中学生たちと考えたことがある。受験は、とりあえず一所懸命、人生は一生懸命。一生懸命も楽しみがあればこそ一生イキイキ人生を送れる。一所懸命も支えてくれる人々がいるからこそどんなにつらいことでも頑張ることが出来るだろう。支えてくれる友人がいくらでもいたわたしは、実に幸せ者だった。心を開くと、世界も開ける。ひとつ新しいことを始めると、新しい世界が広がる。カンボジアと一緒に仕事をした人達は、今、世界中の友人として、心から世界の平和が実現することを切に祈っている。

UNTACの任務は、無事選挙を終え、カンボジアが王国としてその再出発の第一歩を踏み出すことで幕を閉じた。明石代表は苦しい選択を何度も迫られながら、いつも微笑を絶やさず、わたしたちをいつでも励ましてくれた。ケンカをしたり、文句をぶつけ合ったり、何度かくじ

けそうになったわたしだったが、カンボットで一緒に仕事をした仲間たち、分隊が同じ州で仕事をする事になり、日本食の差し入れまでしてくれた自衛隊の皆さん、度々たずねて来てくれて、いろいろ外の世界の情報を教えてくれたマスコミ関係者の皆さん、そして、一番の協力者であり、選挙の主人公だった、カンボジア人スタッフ。支えてくれた大勢の人達がいたからこそ、わたしのカンボジア一所懸命が報われたのだと思う。そして、一年以上もわたしの単身赴任を認めて、応援してくれた家族の理解があったこと。

小学校時代の恩師谷川洋先生に指導されて、クラス中で書きまくった綴り方。当時最長の六十九枚の原稿用紙を埋めた綴り方以来、今回、初めての本一冊分の書きまくりは、わたしにとって、さしずめ別の一所懸命だった。右も左も分からないままカンボジアで仕事をしていたとき、本を書くヒントをたくさん教えてくれて励ましてくれた、NBAの橋田さんや毎日新聞の萩尾さん、光文社の千葉さん、そして、毎日新聞に連載した記事に目を留めて、出版の実現にこぎつけてくれたリヨン社の編集部の水井さん。皆さん本当にありがとう。

信じられないことだらけだったカンボジアが、今では、わたしの故郷のような懐かしさで一杯の国になった。この国に本当の平和がくることを世界の友人達と見守って行きたい。

一九九四年一月

岡村真理子

ボランティアだからできること ● 目次

はじめに 1

第一章

カンボットへ

さあ、出発	10
カンプチア大平原に行く	14
なぜ、カンボジアに	23

第二章

ボランティアは
プロフェッショナル

カンボットで仕事開始	30
ハンドルを握って	34
村の中に	37
住民集会	41
有権者登録	45

第三章

カンボジア気質

アップロター男じゃないよ	54
何でも見物	58
イエス、イエスのノー	65
マンナイター(気にしない)	69
ソウムロイ(金おくれ)	72
銃だけがすべて	76

色白デブは美人
女たち 78

第四章

クレイジードライビング

UNにアタックしたコブラ
アニマル共存 95
ビール一缶で運転免許 104
女の子が死んだ 113

第五章

ポト派の村へ

地雷原 120
シアヌークの世界 124
銃をつきつけられて 132
ポルポト兵のヒッチハイク 136
道も橋も流されて 139
リストにない村 143

第六章

UNTACの人々

カンボットのUNTAC 154
国に想いを残して 164
ムホップチュガニ(おいしいカンボジアフード)
別れ 181
171

第七章

自分が何ができる

第八章

選挙狂想曲

第九章

400日の主婦休暇

第十章

川は流れる

国連ボランティアに

190

日本人として何ができる

194

ラジオください

199

アッちゃん、凶弾に倒れる

206

そして自信はゆらぐ

214

トイレがない

222

投票日はせまる

233

夜明け

246

初日八一パーセント

249

選挙終章

264

奥さんが欲しい

270

男どもの自立訓練

275

蒸発妻の本音

278

カンポット最後の一週間

284

旅の終わりに

291

第一章

カンポットへ



さあ、出発

真白な車体の両側に、黒字で大きく書き込まれたUNのマーク。十二台のピックアップトラックがブルーの国連旗をたてて、ブノンベンのクメール語を習っていた学校の前に勢ぞろいしていた。六週間のクメール語の特訓、これからの任務についてのトレーニングのすべてを終え、いよいよ配属の決まった任地に向けて出発する日の朝だった。

この日、見送られるのは、国連ボランティアとして、カンボット、タケオ両プロビンス（州）に赴任が決まった二十三人。第一陣としてカンボジア入りをした一部だ。まだクメール語研修中の、二陣、三陣の仲間に見送られてのにぎやかな出発となった。二カ月間の、学校とゲストハウス往復のブノンベン生活に、だれもがあきあきしていた。早くフィールドに出たがつていた。これから行くところに、本当に飲み水があるのか、食料が買えるのか、電気があるのか、いや住める家があるのか、誰も知らなかった。それでも誰もが、私たちを待ち受けているかもしれないこうした不安をうち消すかのように、はしゃいでいた。紙テープが舞い、エールがわきおこる。

「元気でね」

「運転には十分注意してね」

「また生きて会おうね」



さあ、いよいよフィールドに出る。私達の気持ちは高揚して行く

「地雷なんて踏むんじゃないよ」
「死んじやならないよ」とは、誰もが冗談半分だった。

内戦の傷跡もいたましいプノンペンでも、この二カ月の間に、街の両側に積み重ねられていたガレキの山、ゴミの山が、日に日に片づけられていった。バイクや、シクロという人力車、そして車も、ぐっと数が増えていった。新しいホテルにレストラン。町の中は建築ラッシュで活気があった。

誰もが、このミッションの成功を信じて疑わなかった。プノンペンで、二カ月生活とともにした友人たち、そして、次々と新しく加わった二陣、三陣の仲間たち、一度任地に出ると、この先、いつ、どこでまた会えるか、誰もわからなかった。別れの抱擁にキス、皆の熱い想いは、焼けるように肌に差し込む熱帯の太陽にますますボルテージをあげていった。

十二台のピカピカのビックアップトラックは一列に並んでコンボイスタイルのまま、国道三号線を南に向かっていった。途中、シハヌークビルに向かう四号線と別れ、本当に一直線。この道の行き止まりが私の配属されたカンボットだという。やりがいを選ぶなら北部、とアンコールワット周辺のシアムリアップや、ボタンバン、少数民族のいるラタナキリといったプロビンスを希望していた私に、カンボットプロビンスがどんなところか、まったくわからない。

赴任に先立ち、各自に、地図、蚊帳、雨具、長靴等が、支給されることになっていた。しかし実際支給されたのは、殺虫スプレー一本。その他はすべて間に合わなかったとのこと。

あれこれ考えたところで、どうにかなるわけもない。具合が悪くなれば、まさかほっぽりっぱなしにされることはないだろうし、とにかくなるようにしかならない。日本を出るとき、国連のミッションの何たるかもボランティアの仕事の中身も、はっきり言って、何もくわしいことはわからなかった。ただ、国連の関与した仕事である、まさか、民間人を危険にさらすようなことはないだろうし、そのへんは十分考慮されているだろうと、良い方に考えていた。あとは、地雷原にさえ入らなければいい。つまり、草むら、人の歩いた跡のないところにさえ入らなければいい。

今年の三月、UNTAACが正式に活動を開始してから突然、世界のあちこちから二万人以上の人々が、この国にやってきて、全土にわたって、カンボジア再生のためのとんでもない大計画を実行することになったのだ。

“金は出せても人は出せなかった”日本ですら、これから法案を提出して人的コウケンとか何とか考へるといふくらいだ。次々と到着するボランティアの宿舎や足の確保すら、ボランティアでこなしている有様だ。そしてほとんどの人たちが、まったく初めての参加だという。一年前の自分のことを考えたって、まさか、ボランティアとして、カンボジアに来ているなんて、考へてみたことすらない。すべてが事の成りゆき。そして世界じゅうから、本当に世界じゅうから、それぞれの想いでボランティアとして、また、上からの命令で、人々が続々とこの国に集まりつつあるのだ。

誰が青写真を描いたのだろう、誰がどうこなしていくのか、あまりにも大きすぎてその全体像は中からまったく見えない。はじめは、誰もが、自分が今しなければならぬことで精一杯だった。あれこれも、つべこべも通りそうにない状態だった。私たちはボランティア。言われたところに、言われたように行かなければならない。この二カ月のブロンペン滞在中に、それはうすうす感じていた。

運を天に任せて出発。唯一の具体的指示は、

「国道三号線を南にまっすぐ百五十キロほど行くと突き当たりがカンボット。町に着いたら、UNTAAC、UNTAAC（ちなみに日本ではアンタックだったが、カンボジアではウンタックと発音されていた）と叫べば、誰かUNTAACの州本部に連れてってくれるから……」
と、いうことだ。地図もないから、本当に道は一本なのかわかるはずもない。が、とにかく一人じゃない。

——やれやれ　これが国連のすることか。

と、思いながらも、車上の人になる。なにしろ初めての左ハンドル。プノンペンをぬけるまで、何度もワイパーを動かしたが、とにかく町を抜けたら、道は本当に一本。真上から照りつける太陽は、どっちが北か南か、まったくわからないが、コンボイの中ほどに陣どって緊張しながらハンドルを握りしめる。風にはためくブルーの国連旗が続く。青い空に吸い込まれそう。雨期ははじまっていたのだが、まだ夕方、スコールのように一時的に降るだけで、朝のうちは、いつでももうだるような暑さが続いていた。半年間焼けつくような太陽にさらされていた大地は、やっと降りはじめた雨で、日に日に緑の色を濃くしていくようだった。

カンプチア大平原に行く

カンボジア、その面積、約十八万平方キロメートル。日本が約三十八万平方キロメートルだから、日本の半分くらい。八百五十万人ほどのクメール人を中心とした単一民族国家である。人口がはつきりしないのは、この国の戸籍すらまだできていないからだ。

そしてこの二十年ほどの間に百万人以上の人々、いわゆる知識階級、支配階級の人々が殺された。拷問で傷つけられた体の傷を見せてくれた人もいた。

一九七九年、ポト派からのプノンペン解放の日、当時の高校を改造したトースレン強制収容